「共に生きる」

みんなちがって みんないい…
そんな思いに共感しながら14年。
わたしたちの“原点”です。

天王寺おばあちゃんゾウ

春子 最後の夏

監督　人見 剛史

大阪で64年間にわたって人々に愛され続けたゾウがいました。天王寺動物園の春子。晩年は衰えが進みますが、飼育員が献身的に春子を支えます。そして、ついにやってきた、その日。天国へ旅立つ時までカメラはまわり続けました。(99分)

字幕あり

大地の花咲き

～洞爺・佐々木ファーム“喜び”ですべてを繋ぐ～

監督　岩崎 靖子

北海道・佐々木ファーム。大切な我が子を亡くしたことをきっかけに、農薬や肥料を使わず、たくさんの命とともに生きる農業への挑戦を決意。虫にも微生物にも、すべての命に“ありがとう”と向き合う内に、野菜にも、働くスタッフにも次々と不思議な事が起こり始める。(95分)

全国初上映

被ばく牛と生きる

監督　松原 保

福島第一原発事故によって被曝し、国の指示で殺処分となるはずの牛が、立ち入りが制限された20キロ圏内で今も生きている。経済価値が無くなった家畜の“いのち”の重さとは…存在が許されない被ばく牛と、その命を守る農家たちの5年間の記録。(104分)

全国初上映　字幕あり

Start Line

監督　今村 彩子

生まれつき耳の聞こえない映画監督が、自転車で沖縄→北海道日本縦断の旅へ。コミュニケーションの壁にへコみ、涙しながらも走り続ける57日間の記録。伴走カメラマン哲さんの叱咤激励、聴力を失った旅人ウィルとの出会い…。ニッポン中のためらう人に観てほしい、一篇の勇気のおすそわけ。(112分)

字幕あり

"記憶"と生きる

監督　土井 敏邦

元「慰安婦」たちが共同生活を送る韓国の「ナヌム(分かち合い)の家」。1994年から2年にわたり、ハルモニ(おばあさん)たちを記録した。心に深く刻まれた傷を抱え、壮絶な戦後の半生を送ったハルモニたち。互いを支えあい、時に激しくぶつかる。消せない過去の記憶と抑えられない感情を吐露する。このハルモニたちはもうこの世にいない。残されたのは、彼女たちの声と姿を記録した映像だった…。(215分)

2015年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第4位

袴田 巌

夢の間の世の中

監督　金 聖雄

袴田事件から50年、釈放から2年。拘禁による妄想は今もつづく。一方で将棋三昧の日々。赤ちゃんを抱き、好々爺の表情。ボクシングの試合の論評もする。「妄想の世界」を「現実の世界」がゆっくりと包み込む。映画は、袴田さんの命の再生を見つめ、生きることの尊さを静かに問いかける。(119分)

第4回日隅一雄情報流通促進賞大賞

字幕あり

沖縄 うりずんの雨

監督　ジャン・ユンカーマン

「老人と海」で与那国島の荒々しくも美しい自然と風土を捉え、「映画日本国憲法」で平和憲法の意義を訴えた、アメリカ人映画監督ジャン・ユンカーマンが真の平和を求め、不屈の戦いを続ける沖縄の人々の尊厳を描いた渾身のドキュメンタリー。(148分)

2015年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位
毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞

えんとこ

監督　伊勢 真一

「えんとこ」は、縁のあるとこ。脳性マヒで寝たきりの障がい者、遠藤滋のいるところ。遠藤は寝たきりの生活を10年近く続けており、不自由な体を引き受けながら、自立したいという強い意志を持ち、介助の若者達の力を借りて1日1日を丁寧に生きている。(100分)

1999年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第8位
1999年度日本映画ペンクラブドキュメンタリー部門第4位
1999年度朝日新聞社今年の日本映画5本入選

関西初上映

えんとこ再訪

監督　伊勢 真一

1999年に製作された映画『えんとこ』の主人公・遠藤滋を、15年ぶりに旧友の伊勢真一監督がカメラと共に再訪するドキュメンタリー。脳性麻痺に加えて老化が進みながらもたくましく暮らす姿を追い、生きる力を伝える短編映像である。
映画『えんとこ』の続編。(22分)

「ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》」の原点とは何か…。
一言で言えば、“共に生きる”という考えです。
誰もが語る言い古された言葉に聞こえるかもしれませんが、
私たちの社会の永遠のテーマであるように思います。

ヒューマンドキュメンタリー映画を観ることで生まれる共感も、
この一言に尽きるでしょう。

ちがった個性を持つ一人ひとりが、同じ地域、同じ時代に、
お互いのちがいを認め合いながら“共に生きる”。

映画祭の場で映画を通じて、
ちがいをしっかりと見つめてほしいと思います。
スクリーンに映る一人ひとりに、
自分自身の存在を重ね合わせて観てもらえたらと思います。

そして“共に生きる”という生き方を探るきっかけになれば、
と思うのです。

Human documentary film festival abeno 2016

上映作品監督　プロフィール

人見 剛史（監督）

大阪市出身。テレビ大阪報道部記者・プロデューサー。テレビ版「春子　最後の夏」でギャラクシー賞奨励賞などを受賞。

今村 彩子（監督）

名古屋出身。愛知教育大学在籍中にカリフォルニア州立大学。ノースリッチ校に留学し、映画制作・アメリカ手話を学ぶ。

ジャン・ユンカーマン（監督）

1952年米国ミルウォーキー生まれ。『HELLFIRE:劫火・ヒロシマからの旅』、『老人と海』、『映画 日本国憲法』など、日米両国を拠点に活動。

松原 保（監督）

テレビ広告業界を生業。テーマを見つけては自主的に取材を続け、本作品は長編ドキュメンタリーとして初監督作品。

土井 敏邦（監督）

1953年佐賀県生まれ。フリー・ジャーナリスト、映画監督。「沈黙を破る」などgovドキュメンタリー作品を発表。受賞多数。

岩崎 靖子（監督）

映像作家。命の無限の輝きを追いかけた作品は、日本のみならず海外18カ国でも自主上映の輪が広がっている。

金 聖雄（監督）

1963年大阪出身。サラリーマン、商売、助監督などを経験後、フリーに。PF映像やテレビ番組、映画など、幅広く手がける。

ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》
総合プロデューサー

伊勢真一（監督）

1949年東京生まれ。答えよりも、問いを持ち続けたいと、幅広くヒューマンドキュメンタリーを手がける。

ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》
ディレクター

榛葉 健（監督）

1963年東京生まれ。87年毎日放送入社。震災、自然、社会派など“いのち”をテーマにした作品で国内外の受賞多数。

それぞれ作品上映後に
監督や出演者による挨拶があります

27日(土)
ドキュメント・トーク

「《生きる》を伝える」
「記憶と記録」も
お楽しみください

Human Documentary Film Festival abeno Voices

ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》2015にお越しいただいた、お客様の声の一部です。

すばらしいラインナップで、今回初めて3日間通しで日程調整し、最優先スケジュールとしました。
予想をはるかに超えて、この流れで観るからこその平和、人の生活、継ぐもの、人の背負うものを感じさせられました。争いの結果の怖さも伝わり、その答えとして違うことを受け入れて理解しようと共にある姿も観せていただきました。

●

衝撃を受け続けた2日目の4作でした。このドキュメンタリー映画祭に来なければ観ることのできなかった作品、知ることのできなかった事実に圧倒されました。各監督の伝えたい!思いがしっかり伝わりました。

●

あまたある映画の中から見るべき作品をピックアップしてもらえる映画祭に感謝しています。いろいろな作品を拝見し、自分を見つめ直し、自分の生き方や人との関わりについて考えることができる良い機会を与えていただいていると感じます。ありがとうございます。来年も楽しみにしています。

●

初めての参加です。本当に伝えたい事、伝えなければいけない事は何なのか。それぞれの映画監督の熱い思いが感じられ感動しました。

●

充実の10乗の2日間でした。すべての作品ひとつひとつの内容が濃くて、明日から思い出しながらかみしめたいと思います。拝見した作品すべてに共通して感じることは、一人一人の生き様ってまったく固有のもので自身の意志ではどうにもならない出自、時代の状況に左右され、それでも自己を生きていく人々を、製作する方々が個人の目線で対話しているので、自分自身が直接対話しているように思えました。もっともっと見ていたい2日間をありがとうございました。

●

毎年、この映画祭を楽しみにしています。今年も学び、考えさせられる作品が多く、見ごたえがありました。コンテスト入賞作品も甲乙つけがたい作品ばかりでした。

●

ここ5年、毎年このドキュメンタリー映画祭に参加させていただいております。いつも決まった席に着いて、作品一つ一つに目を向けております。現実から眸をそむけないための漢方薬とでもいうべく、ジワジワ身にしみてくる粒ぞろいの良い作品に出会い、感謝。理屈ばかりで疲弊する世に、理屈では語れない一瞬の本物に出会えるとき。これからもどうぞ発信し続けることを諦めないで欲しいと願うばかりです。

●

ドキュメンタリー映画って、自分の考え方を確認できるように思います。自分も含めて全てのものに対する接し方を再考する機会になりました。ありがとうございました。来年の映画祭の案内を送っていただけたらうれしいです。

●

今年もすばらしい感動をいただきました。この様な映画は他では絶対に見ることはできません。今から次回も是非来たい。今度は友達を一杯連れて来ようと期待です。